

平成17年9月6日大水害

あれから10年

>4<

教訓は生かせるか…

森北佳昭氏基調講演
これからの防災・減災・水害・土砂災害を中心として



した。

近年は雨の降り方が非常に局地的、集中化、激甚化し、それはデーター的にもはっきりしています。30年前と比べて、時間雨量50ミ以上、の豪雨発生回数が1・4倍に増え、集中豪雨も増えています。国連の気候変動に関

死者74人を出した昨年8月の広島土砂災害は各所で土石流や崖崩れが発生しました。この時は1時間に100ミ超、3時間で200ミを超えるような集中豪雨となりました。積乱雲が次から次へと線状に発生するバックビルディングを形成し、集中的に雨を降らせま

温暖化による気候変動

台風、強いまま接近、上陸

雲が増加し、海面からほとんどエネルギーが供給されることになるので、強いまま日本に接近、上陸することになります。

する政府間パネル（IPCC）は一昨年「温暖化については疑う余地はない」、そして「21世紀末までに気温は0・3〜4・8度、海面水位は26〜82センチ上昇する」、さらに「極端な降水がより強く頻繁となる可能性が非常に高い」というレポートを出しています。

地球温暖化により海水温が上がり海面からの蒸発量も上昇します。そうすると台風の

頻度も増加し、結果として川の流量が増加することで洪水が増え、土砂災害も激化するという傾向が出てきます。将来像として、豪雨による降水量が全国平均で10〜25%増加し、さらに施設計画を上回る規模の洪水の発生が2〜4倍に増える

と予想しています。こういう地球温暖化、気候変動の中でどうしていくのかというのを国交省では社会資

本整備審議会で諮問



山間部では土砂災害が所々で発生。高千穂町土呂久では土石流で2世帯5人が亡くなった（土石流から一夜明けた平成17年9月7日午前の捜索現場）

ジュールとなっています。

欧米ではすでにいろいろな対応を取っています。発生頻度が年0・1%と低い洪水についても浸水想定をつくり、住民に提示しています。将来温暖化で外力が増えることを見込んだ施設的设计にも取り組んでいます。

わが国ではだいたい100分の1の年超過確率（年間発生確率1%）での浸水想定しか出していません。それを外国では1000分の1（0・1%）、1万分の1（0・01%）と確率の低い洪水でも、どこまで浸水しますよ」という想定を出しています。

防災・減災を考えるシンポジウムから――

し、短期・中期・長期の適応策を取りまとめ、政府の計画として、この夏に策定するスケ